
魔法少女リリカルなのは 宿敵と書いて友と読む

ヤトー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 宿敵と書いて友と読む

【Nコード】

N4221X

【作者名】

ヤトー

【あらすじ】

カインⅡグレアムはギルⅡグレアムの養子である。彼は親友のクロノⅡハラウンに勝つため日々努力を重ねていた。これは、彼が約束を果たすために頑張る物語である。

現在原作前オリジナル話展開中。原作開始はもう少し先になる予定。

更新は遅く、かなり不定期になると思われます。

批評感想大歓迎。ただし誹謗中傷は勘弁してください。作者はかなりの豆腐メンタル+初投稿作品なので。

では、楽しんでいただけたら光栄です。

Episode 1 Battle with Chrono

白衣の魔道師が宙を舞う。

トレーニングルームの無機質な空間の中を縫うように飛び回りながら、同じく宙を舞う黒衣の魔道師と対峙する。

二人の魔道師は、まるで鏡合わせの様に同じ姿をしていた。

厚手のジャケットは裾が足元までひらめき、足を覆うのは同じような質感の長ズボン。

両肩から伸びる円錐から手を覆うグローブ、その手に握られた魔道師の杖までがほとんど同じようなデザインでありながら、その色だけは写真のネガポジを逆転させたように対照的な白黒であった。

雲のごとき灰色の髪を逆立たせた白衣の魔道師の瞳は赤く、常に睨みつけるように相手の姿を追っていた。

夜闇のごとき漆黒の髪を寝かせた黒衣の魔道師の瞳はまた黒く、揺らぐことなく相手を追う様は深海の色を思わせる。

白衣の魔道師が鋭い軌跡を描いて相手へ接近しようとする、黒衣の魔道師は杖を一閃させ、生成した青白い魔力弾をカウンターの要領で撃ち出した。

それを見た白衣の魔道師は急停止し、白銀の魔力を纏った杖で魔力弾を払いのけるとすぐさまその場から離脱し追撃に備える。

その彼の眼前で、黒衣の魔道師は杖先にためた魔力の塊から今度は一羽の鳥を思わせる弾丸を撃ちだした。

誘導操作弾。黒衣の魔道師の十八番とも言えるその魔法は、複雑な軌跡を描きながら先ほどの弾丸以上のスピードで白衣の魔道師を

追い詰めていく。白衣の魔道師はどうかして振り切ろうと急旋回、急上昇に急降下を繰り返すが、その全てをまるで予測していたかのように魔鳥はつかず離れず絶妙な距離を保ちながら白衣の魔道師を追い続ける。

時折白衣の魔道師が操り手たる黒衣の魔道師へと接近しようとするも、すぐさま魔鳥が回り込んで行く手を遮ってくる。そうして行くきながら彼自身も動き回り、徐々に白衣の魔道師を追い詰めていく。

だが、白衣の魔道師もただ追われているのみではなかった。

油断なく構えながら、魔鳥の動きと相手の動きを把握し宙を駆け回る。そして彼がある座標に到達したときだった。彼が通過しようとした座標から青白い鎖が幾本も現れ、彼を捕らえようとその魔手を伸ばす。

設置型捕縛陣。同じく黒衣の魔道師の得意魔法を、しかし白衣の魔道師は待っていましたとばかりの笑みを浮かべると、その手の杖に命じて打倒の魔法を呼び出す。

彼の眼前に白銀に光る円形の魔法陣と、彼自身を囲むように帯状の光が展開される。それはさながらレールガンの様に光の銃身を作り出すと、魔道師自身を弾丸として加速、標的——すなわち黒衣の魔道師——へと発射した。超高速に達した彼を捕らえることができず、役目を果たせなかった魔力鎖は青白い光となって霧散する。

凄まじい加速で一直線に向かってくる白衣の魔道師の姿に、初めて黒衣の魔道師の顔が驚愕に歪む。魔鳥を手元に呼び寄せようとするが、超高速で迫る相手にはまるで追いつかない。

そうして黒衣の魔道師が接近戦へ思考を切り替えた瞬間、白衣の魔道師はその勢いのまま杖を彼に叩き付けた。

杖を通じて伝わる衝撃に顔をしかめる彼に向けて、白衣の魔道師

は振りぬいた杖の先に魔力刃を発生させると返しざまに一閃させる。そこからさらに石突きで、防御の構えをとる黒衣の魔道師の杖をはじくと袈裟に斬り付けまたも返しざまに突きを見舞う。

伸びきった腕をゴムの様に引き戻し、相手の体制が整わぬうちに鋭く杖を突き出す。

さながら機関銃の如き乱れ突き。その切っ先に黒衣の魔道師は防戦一方にならざるを得ず、そこへ更に白衣の魔道師は横薙ぎに袈裟斬り、振り下ろしに振り上げと縦横無尽の槍捌きで黒衣の魔道師を追い詰めていく。

そうして絶え間ない連撃の果て、浮いた黒衣の魔道師の杖を跳ね上げると、渾身の力で担ぐように構えた杖の石突きを相手の腹へ振り下ろし一気に吹っ飛ばす。

そのまま切っ先を突き出すように構えると、その眼前に魔法陣を展開し膨大な魔力を溜めていく。

その輝きが臨界点に達した時、白衣の魔道師の叫びと共に白銀の槍を模した魔力弾が、一点に向けて怒濤のように連射された。

「……これで、どうよ」

肩で息をしながら、カインは眼下に広がる煙を見て呟いた。

自分の距離に持ち込み、体勢を崩した上での集中砲火。考えうる限り最大の一撃であり、それを当てる条件もそろっていた。相手はまず間違いなくノックダウンされているはずだが……

「っ！」

反応は一瞬。煙幕の向こうから放たれた凄まじい熱量の光線を間一髪で回避する。

危なかった。

そう思考する間もなく、晴れた煙幕の向こうから放たれた複数の魔力弾が牙をむく。先ほどの意趣返しのように絶え間なくばらまかれる魔力弾に、カインはよけるだけで精一杯だ。

「……なら、ブースト・アップ……！？」

ならばと先ほど接近した魔法を展開しようとした瞬間、まさに撃ちだされる刹那に眼前に迫る魔力弾にすぐさまキャンセルしてギリギリでかわす。思わず冷や汗をかいたカインに、相手が声をかけた。

「ブースト・アップ、術者本人を弾丸にみたてて加速することです。でもつもないスピードでの移動を可能にする魔法だけど、それはあくまで直線のみだ。発動後はある程度減速するまで方向転換も難しい。奇襲ならともかく、真正面から使おうとするのはこのレベルの魔法戦だと自殺行為だぞ。カイン」

「るせー、そんなことわーってるよ。ってかなんでぴんぴんしてるのさ、クロノ」

思わず毒づくカインの目の前には、言葉通り小憎たらしいほどの澄まし顔でデバイスを構えるクロノの姿があった。その姿には多少の埃は見られるものの、カインが望んだような大ダメージの痕跡はこれっぽっちも見られなかった。

半眼でにらむカインの視線を受けて、クロノは心外だと肩をすくめて見せると、左手の人差し指を立てる。

「あんな無茶苦茶な構えの突きじゃ体勢を崩すには力不足だよ。あとチャージタイムが長すぎる。あれだけあればシールドを展開するには十分だ」

「……さよけ」

確かに腕が絡んだ状態で、しかも石突きで撃ったのはかなり無茶だと自分でも思ったが、それでも思いのほかクロノが吹っ飛んだので結果オーライだと思ったのだ。

あれはクロノが自分から距離を置くためにわざと大げさにやられて見せたのだろう。その上で体勢を立て直し、その後のカインの攻撃の着弾時の煙にまぎれて攻撃してきたのだ。相変わらず賢いというか、小賢しい策を使ってくる奴だと内心毒を吐く。これで自分より三つ年上だというのだから嫌な限りである。身長は自分よりも低いくせに。

「……何か言ったか？」

「いや、別に？」

しれっと嘘をつきながら、カインは次をどうするか考えを巡らせた。

ロング、ミドル、クロスとオールマイティな強さを持つクロノに対し、カインが対抗できるのはクロスレンジでの白兵戦とミドルレンジでの殲滅力だ。だがここまで距離が開いてしまつては、先ほど

の様にカインの間合いには近づけさせてはくれないだろうし、後者なんぞチャージの為に足を止めた瞬間にジ・エンドだ。ならばどうするか……

「で、いつまで考えてるつもりだい？」

「ってうおっ！」

思考の海に沈んでいたカインだったが、クロノの言葉に慌てて意識を引き戻す。その瞬間撃ちだされたステインガーレイを飛び退ってかわすと、その先へ先回りするかのように次々とステインガーが撃ち込まれていく。

それらを躲す為にカインは大きく距離を取らざるを得ず、彼が望む距離からはどんどん遠ざかっていく。どうにか対処しようとカインも自身の射撃魔法であるシャープバレットを打ち出すが、彼が一息に二発作り出せるのに対してクロノは倍以上の五発を狙い澄ました位置に切れ目なく撃ちこんでくるのだ。精密射撃が苦手なカインではとても対処しきれない。

「だああああ、くそっ！！」

——このままではジリ貧になる。

そう思ったカインは迎撃を選び、強引にステインガーをデバイスで払うとクロノめがけて突っ込んでいく。そこへ今度は三発の魔力弾が迫ってくる。

なにくそと、先ほど同様デバイスで叩き落とそうと振るった時だった。魔力弾はデバイスを大きく迂回するとそのままカインの腹部に炸裂した。

「うあああっ！？」

初めてのクリーンヒットに飛行魔法を制御できず、カインは苦悶の叫びをあげながら落下していく。だが、

——今だ！

先ほどのクロノと同じ構図。違うのは攻撃を喰らっていたかどうかだが、誘導弾三発程度ならば問題ない。カインは歯を食いしばって体勢を立て直すと、デバイスに登録していたもう一つの加速魔法を発動させた。

「ソニック・ムーヴ！！」

白銀の光と化したカインは、開いていた距離を物ともせずクロノの背後に回り込む。だがそこへ、またしても設置されていたディレイドバインドが発動する。しかし、

「邪魔だあああつ！！」

叫びと共に体中に魔力をみなぎらせ力技で鎖を弾き飛ばす。そのまま腰ために構えたデバイスの中ほどに円形の魔法陣を発生させ、切っ先を頂点とした光の円錐を作り出す。

「しまっ……」

「おらああああつ！！」

クロノが驚きの表情でこちらにデバイスを突き出してくるがもう遅い。さながら突撃槍ランスのようになったデバイスを構え、カインは己の最強の一撃を叩き込んだ。

はずだった。

「んなつ？」

手ごたえの軽さに声を挙げるカイン。突き出したデバイスはクロノの身体を捕らえたはずだった。しかし帰って来たのはまるですり抜けたかのような手ごたえの無さであり、貫かれたクロノは青白い魔力となって霧散する。幻術だと気付いた時はもう遅かった。

『ブレイズキャノン』

女性的な機械音と共に振ってきた熱戦を喰らい、カインの意識は闇に溶けた。

「これでクロノの五十二勝目ね」

「で、カインはまたも連敗記録更新、と」

「……るせーよロッテ姉」

「んー？ そんな生意気なこと言うのはこの口かなー？ それそれれ！」

「い、いひやいいひやい！ ははへほ！！」

「……何をやっているんだ二人とも……」

スポーツドリンクを飲み終わったクロノの呆れた声を受けて、リゼロッテはようやくカインの頬を引っ張っていた手を離れた。解放されたカインは痛みに赤くにじんだ頬を抑えて涙目になっている。よっぽど痛かったらしい。

「はいはい、三人とも注目。ロッテも遊んでないで。整理できたの？ さっきの模擬戦」

「大丈夫」

今度はクロノにその魔手を伸ばそうとしたロッテだったが、アリアの制止を受けてその隣へと移動する。そうして展開するのは、先ほどの模擬戦のいくつかの場面をピックアップしたモニターだ。

「クロスケはクロスレンジで一方的だったのがちょっと頂けないかなー。いくらカインが強くてももう少し対処できないとね。自分の戦術が崩されたからと言って動揺するのもマイナス」

「自分が優位になるよう戦況をコントロールするなら、不利になる状況も考えておかなきゃね。ステインガースナイプも、撃つてる最中出来るのがバインド設置だけなのは考えものね。もう少し行動にバリエーションを増やさないと」

「……そうか」

そう言って難しい顔つきで黙り込むクロノ。その頭では、先ほどの模擬戦の内容がシミュレーションされているのだらう。僅かな時

間でもやれる事は怠らない。そういう真面目な奴なのだ。クロノ・ハラウンと言う奴は。

自前のモニターを出して考え込み始めたクロノを見ながらカインがそんな事を考えていると、どうやらカインに話が移ってきた。

「で、カインだけど、クロノとは逆にクロス以外でやられ過ぎ。クロスに持ち込んだのもうまい手とは言えないし、最後のバインドはがしなんて強引もいい所よ。自分の距離に持ち込めるよう、もう少し戦術眼も身につけないと」

「それに肝心のクロスも詰めが甘いしねー。あそこで決められないのは最悪」

「……はい」

容赦のない言葉にぐんと頭が下がる。さんざん言われてきている事とはいえ、それを指摘されるのは改善できていない自分を認識するようでやっぱりへこむ。自分にはクロノの様に瞬時に切り替えなど出来ないのだ。

「……はあ」

「こらこら、ため息つかないの。良くなってる部分だって、もちろんあるんだから」

「え？ マジ!？」

「……立ち直り早いわね……」

ロッテが何やら引いているが気にしない。微妙に前に乗り出しつつ、カインはアリアの言葉を待った。

視線をそらせば、行動にこそ出ないものの『自分も聞きたい』と何よりも雄弁に瞳で語るクロノの姿も見えて、アリアは苦笑しつつモニターを操作する。

「まずはクロノ。さつきも言ったけど、戦況を動かす技術は増してる。直射と誘導の二つで自分に有利な状況を生み出すのはもちろん、一度破られた後の改善も早かったしね。決まり手の幻術なんかもよかったわ。」

あとは、さつきも言ったけどもう少し使える手札を増やしてみたいと思う。それと地力の底上げ。ロッテの言うとおり、近接戦も自力で何とかできるようにしないと、ただの器用貧乏で終わるわよ」

「で、カイン。確かに戦術眼はまだまだ拙いけど、それでもクロスケが張ったバインドへの誘導を回避できてたのは進歩だねー。クロスは相変わらず強いし。」

課題は詰めの甘さと、相変わらずなミドルとロングの対処の仕方。射撃魔法ももうちょい使えるようになってくれないと」

アリアとロッテ。交互に出た二人の良かった点に、カインはあからさまに、クロノは努めて冷静を保ちながら、喜びの表情を浮かべた。

彼女たちに弟子入りして、クロノは六年、カインは三年になるが、色々しごかれたりからかわれたり（こちらはほとんどロッテだが）する中、ほめられるのはやはり嬉しかったのだ。なんだかんだで二人ともまだまだ子供。その辺りの感情は素直だ。

「さーて、反省会も終わった事だし、楽しい楽しいロッテとアリアの訓練に入るよー」

「うげっ！」

「あらカイン。そんなに楽しみななら今日は実技じゃなくて座学をやるつかしら？ 一対一でみっちり」と

「ま、待って、勘弁……」

アリアに詰め寄られて目に見えて分かるほどカインの顔が真っ青になる。殴る蹴るが得意な人間の多分にもれず、机に向かつての座学をカインは何よりも苦手としていた。曰く、『難しい理論や構築を習うより、杖振ってる方が楽』との事。

迫るアリアとの間に壁を造るように手を上げながら、徐々に後ずさりしていくカイン。それを追うアリア。そして一瞬の硬直ののち

「ソニツク・ムー……?!」

高速魔法を発動しようと白銀の光に包まれたカインの身体を、それ以上の速さで藍色の縄が絡め取った。

「はいクロノ。これが フープ・バインド 。結構技術がいるけど使い勝手はいいわよ？ それと……」

「ぐぎっ」

そう言っただけは別のバインドが、力任せに破ろうとしたカインの身体を締め上げる。

途端、カインの身体を覆う魔力光が消え去った。見るものが見れば、彼の身体強化魔法が解けた事がわかるだろう。

「これは ストラグル・バインド こっちは逆に使いどころが限られる魔法だけど、覚えというて損はないわ」

「そ、そうか。ありがとう……」

容赦なく弟弟子を実験台にするアリアに、答えるクロノの顔が引きつる。

助けてくれと、カインが目で訴えかけているのが見えるが、彼とて先ほどの模擬戦で疲労している。その上目の前の彼女たちは歴戦の兵^{つわもの}なのだ。たかだか執務官候補の自分に何ができると言うのだろう。

（すまん……）

（裏切り者おおおおー！！）

「じゃあ、行きましようかカイン」

視線だけで謝るクロノに対し、カインは壮絶な叫びを込めた目付きをしながらバインドで縛られたままずるとアリアに訓練室の出口へと引きずられていった。その姿に、見たこともない肉屋に売られていく子牛の姿が見えたのは何故だろうか。

そんな微妙な思考にとらわれているクロノの肩に、軽い感触が伝わった。

「さくろてクロスケ、私たちも訓練と行こうか」
「げっ……」

油の切れた人形のような、ぎこちない動きで振り向けば、そこには満面の笑みを浮かべたロッテの姿があった。

その瞳に浮かぶ、まるで猫がネズミをいたぶる時のような——實際猫型の使い魔^{使い魔}なのだが——嗜虐的な光を見て、思わず口元が引きつる。正直、嫌な予感しかしなかった。

この日、クロノ・ハラウンとカイン・グレアム両名は厳しくも優しい師匠達によってこつてりと絞られたのだった。

Episode・2 Diner time (前書き)

やっと書けたので投稿します。本当は先週にあげたかったのですが、体調不良でここまでかかりました。すいません

Episode・2 Diner time

「で、二人ともそんな状態だと……」

「……そうだ」

「……………」

語られた凄絶な訓練内容。その中身に若干顔をひきつらせつつ、エイミィは目の前、辛うじて反応を返すクロノに確認をとる。その隣に座っているカインと言えば、もはや真っ白に燃え尽きている。

三人がいるのは本局内の食堂。ちょうど昼時の為、多くの局員が右往左往している中エイミィは先に席を確保していたのだが、やってきた二人の状態——展開したS2Uを杖代わりに、その肩にグロッキーなカインを支えてやって来たクロノを見て思わず大きな声を上げてしまい、食堂内は一時騒然となった。

それはそうだろう。執務官候補生の黒い制服を着た少年が二名、ズタボロの状態でやって来たのだ。

その後、気力を無くして倒れ込んだ二人を、慌てて周りの手も借りながら席に座らせ、どうにか対応ができたクロノに話を聞いていたのだ。

長々と話して喉が渴いたのか、クロノが億劫そうに手を目の前のコップに伸ばし、そのままグイと一気に呷る。そうして吐かれた息は、どこか父が酒を飲んだ時に似ているとエイミィは思った。……

…自分より年下でそんなオーラを出しているこの少年は何なのだろう？

深く考えると笑えない疑問を頭の片隅に追いやると、エイミィは先ほどから一言も口をきかないカインの方に目を向けた。言葉どころか身じろぎもせず、開かれたままの眼はガラス玉の様。ぶっちゃけ息もしてなさそうである。

「カインくん、おい」

「……………」

「……はい」

そう言っただけカインの口元に手持ちの菓子を持つていく。もそもそと口を動かすカイン。それを何度か繰り返す。

そして、

「あ……………生き返った……………」

カインはようやく身体を起こした。顔色も、健康的とはいえないがどうにか色が戻っている。危険域は突破したらしい。

「（よかった）……………はあ」

安心してくると、お腹がすくのが人間と言う生き物である。多分にもれず、エイミィもそうだ。

だから、手をパンと打ってエイミィは言った。

「じゃあ、ご飯にしようか！」

「相変わらずよく食べるね、カイン君は」

「そうっすか？ これくらい普通ですよ、クロノが少ないだけで」

「僕は適量だ」

ほどなくして戻って来た三人は、おのおのが頼んだ食事をテーブルに置いて座る。

エイミイはスパゲティにサラダという年頃の少女らしいメニュー。クロノはカレーに同じくサラダだったが、カインはハンバーグ定食と焼き魚定食の二人分を並べていた。

カインからすれば訓練後はこれくらい食べねばもたないので当然だと思っているのだが、まだ八歳と言う彼の年齢を考えればクロノとエイミイが感心するのも当然ともいえよう。

それからしばらく、三人は黙々と目の前の食事に手を付けるばかりだったが、ふと思い出したようにカインが顔をクロノに向けた。

「ん……そう言えばさ……むぐ……クロノ」

「話は口の中の物を呑み込んでからにしろ、カイン。行儀が悪いぞ」
「んむ……」

クロノの指摘にカインはむっと眉根を寄せると、口の中の物を無理やり呑み込もうとする。が、どうやら詰まったらしく慌てて、胸の辺りを叩きだした。しょうがないと言った表情でクロノが水の入ったコップを目の前に差し出すと、半ばひったくるようにしてそれを取ったカインは中の水を一気に口に流し込む。

「げぼっ、げぼっ……サンキュ、クロノ」

「次からは気をつける。で、何だカイン」

「いや、試験でちよつと聞きたい事あったからさ」

「それならさつきアリアに聞けばよかったじゃないか」

「しょうがないだろ、あんな訓練の後じゃ忘れてるよ」

そう言つてカインは目の前に展開したモニターを操作すると、その辺りをピックアップする。そうしてクロノと自分の間にモニターを移動させると、あれこれと質問をしだした。それに、一つ一つ丁寧に答えていくクロノ。そんな二人の姿は、傍から見れば仲の良い兄弟そのものだ。実際、同じテーブルで見ているエイミィは微笑ましいものを見る顔で二人の事を見ていた。

「そつか、カイン君の試験近いんだっけ……あれ？　ってことはクロノ君も近いんじゃないの？」

「そうだが」

「へえ。余裕だね。クロノ君。執務官試験前に他人に教える余裕があるなんて」

「別に。人に教えるのは自分にとつても復習になるし、あと一週間しかないんだ。今からじたばたしてもしょうがない」

からかうような声音で聞いてくるエイミィに、サラリと返すクロノ。これ位のやり取りは、彼らの間では当たり前前の事になっていた。

彼女が言う執務官試験とは管理局で年に数回行われるものの事で、その難易度は毎回の合格者数が受験者数の数％にしか満たないことからもうかがい知れるだろう。実際に、クロノも一度落ちている。執務官という、管理局内でも法務と捜査、部隊指揮の三つにおいて強い権限をもつ職業故に、その門は狭い。それを突破する為に、クロノは日々勉強と訓練に力を注いでいた。

一方カインが受けるのは、その執務官の補佐官の試験である。こ

ちらもまた難易度の高い試験で、カインも苦手な座学をどうにかこうにか唸りつつ頑張っている。

二人の努力を知っている身としては、ぜひとも二人一緒に合格してほしいところだが、

（クロノ君はともかく、カイン君はなあ……）

現実はそのうまくいかないだろう。クロノは落ちたとはいえ一度受験していて傾向などがある程度つかんでいるし、魔法戦も十分な実力を持っている。また、士官学校を出てから候補生として長い間下積みをしているのだ。若いながらもその能力は同年代でも図抜けている。今年はまず受かるだろうとエイミイは思っている。

一方のカインだが、実技の方は確かにいい線行くだろうが、致命的なまでに彼は事務仕事が苦手なのだ。学生時代、クロノと二人で何度課題を手伝ったことか。おまけに彼はクロノと違って学校を卒業してから一年足らずで、部隊経験も少ない。執務官補佐という仕事は事件捜査の際に他部隊、特に現地の陸士隊や武装隊などの折衝や情報収集を行う事も多いので、その辺りの経験が少ないのはあまりにも頼りない。

エイミイとしては二人とも受かってほしいのだが、その辺りはどうにもならないだろうと思っていた。

「……と、こんな感じかな。大丈夫か、カイン」

「OKサンキュー！ 助かったぜクロノ！」

「ならいいんだが」

返事と共にモニターをしまうと、カインはクロノに笑顔で答えた。

先ほどまでの疲れはどこへやらといった感じで、カインの表情には力が戻っている。立ち直りが早いのは彼の美点だ。そのまま目の前の残りを平らげにかかる。

その光景をクロノと二人、不安げに見ながら、エイミィも自分の食事を進めていった。

「どう思う？ クロノ君は」
「何がだ？」

唐突に声をかけられ、クロノは振りむいた。

食事を終えて解散となり、今はエイミィと二人局の寮への道を歩いている最中だった。カインはまだやることがあると残った為、今は彼女と二人きりだ。

年頃の少女、それも一般的に可愛らしいと評される少女と二人きりという状況は、普通だったら何かしらの期待や緊張を及ぼすものだが、いい加減クロノも慣れているし、エイミィもそんなクロノの反応はつまらないので何もしない。これがカインだったならまだ弄ることもあるのだが。

ともかく、淡泊なクロノの対応に、エイミィはもう一度先ほどからの疑問を口にした。

「クロノ君から見てさ、カイン君試験受かりそう？」
「ああ、その話か」

エイミイの意図を読み取って、クロノは考えてみる。

カインは決して出来が悪いわけではない。それは、しっかりと士官学校を卒業し、基準の成績を満たした上で現在候補生として頑張っていることから明らかだ。また、幼少期からの英才教育とも言える二人の師匠からの教えもあって、魔道師としての実力は局内でもかなり高いレベルにある。おまけに本人も目標の為ならば努力を惜しまない性格であるのはクロノも知っているので、あまり悪い評価を下したくはない。しかし、それらを鑑みて、

「今回は、ちょっと厳しいかもね」

「あ、やっぱりそうなんだ」

そう言わざるを得なかった。しかし

「一緒に勉強しているからカインがどの辺りまで理解しているかは大体把握してるけど、やっぱり合格ラインにはちょっと届きそうにないよ。」

「そっか、残念だね」

「けど！」

いきなり大きな声を出して遮ってきたクロノを、エイミイは驚きの目で見つめた。常に冷静であるよう努めているクロノからすれば珍しい行動だ。クロノは続ける。

「まだあと一週間あるんだ。あいつもまだまだ頑張ってるし、結果が出るまでは断言できないよ」

「……へえ、そつか」

最初はあつけにとられていたエイミイだったが、一瞬の間をおいてニマアとした表情になった。そこにあるのは面白い事を聞いた、というものだ。

何となく嫌な予感を感じながら、クロノは答える。

「……なんだよ」

「べつに」 なんだかんだで、クロノ君も心配なんだな」って
「んなつ!？」

エイミイの指摘に思わず狼狽した声を上げるクロノ。彼としては客観的な評価をしたつもりなのだろうが、どう見ても彼の主観が入っているのはバレバレである。でなければ彼があれほど強い声を上げたりはしない。

結局のところ、一番カインに落ちてほしくないのはクロノなのだ。そのことがわかって、エイミイはものすごく機嫌だった。

「それにさ、もしこれでクロノ君が執務官になって、カイン君も受ければ、私とクロノ君とカイン君でトリオ組めるよ! そうしたらきっと楽しいよね」

「……何を馬鹿なことを。そんな身内人事、通るわけないじゃないか」

そうやってエイミイの考えを一蹴するも、その未来図を想像する。

事件捜査に策もなく突っ込むカインを、自分が後ろから抑えつけ、その背後でエイミイが面白そうな顔で煽っている。更にその後ろで、自分の母親がハンカチを振って楽しそうにしているのまで見えたのは錯覚だろうか。

（ありえないな。それは）

首を振って、今見た映像を振り払う。どう見ても、次元世界の最前線で捜査する執務官達の姿ではない。それに何より、結局のところ自分だって試験に受からねば執務官にはなれないのだ。

「先行くぞエイミィ。僕だって時間がないんだ。やれることはすべてやらないと」

「OK。クロノ君も頑張ってね」

「ああ」

一声返事をして、廊下を駆ける。柄にもなく何故か、興奮してるのが自分でもわかる。その原因は、先ほど見た未来図か。

（関係無いな）

それもまた思考の片隅に追いやって、クロノは走る。自分自身もまた、目標を達成するために。

先ほどの未来が現実のものとなるか。それはまだ、先の話。

Episode・2 Diner time(後書き)

あとがきっぽいものは更新報告のほうでやろうと思います。読後すぐ見たくないような話を書く可能性もあるので。読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4221x/>

魔法少女リリカルなのは 宿敵と書いて友と読む

2011年10月22日13時13分発行